図書館だより No. 6

平成 30 年 10 月 5 日

秋の風に乗って金木犀の香りが運ばれてくる季節になりました。とにかく今年の夏はなるべく外に出ないようにしていた、という人も多いかと思いますので、その分もこの秋はあちこちへの散策を楽しみたいものですね。今月7日（日）にはところざわまつり、20日（土）21日（日）には川越まつりがそれぞれ催されます。お祭りの醸し出す賑やかな雰囲気は、そこにいるだけで気持ちを明るくさせてくれますし、屋台グルメの数々にも心惹かれますよね。また、ハロウィンにちなんだイベントやスイーツが盛り上がってくる頃合いですね。おいしい秋も楽しみましょう。

さて、早い人はもう進路が決まってきているようですが、これから受験を控えている3年生の中には面接対策として読書をする人も多いと思いますが、「普段あまり本を読まないから、どんな本を読んだらいいかわからない」と悩んだ時には、いつでも相談に乗りますので気軽に私たち司書に相談してください。

＊埼玉歩きは楽しい＊

291-サ 『埼玉さんぽ』　交通新聞社

身近にある場所ほど、「いつでも行ける」と思ってなかなか行かないものです。日本全国には、たくさんの名所や名物がありますが、埼玉だって他所には負けていません。例えば、川越のまるひろ屋上にある観覧車や所沢の焼きだんごも名所・名物です。埼玉のことなら大体把握しているつもりでいても、いざこの本を開いてみると、「こんな所もあったのか！」という発見があったり、「これは食べてみたい」と食欲をそそられたりと、知らずにいた埼玉の魅力を知ることができます。県外への旅も楽しいですが、この秋は埼玉県内を楽しみ尽くしてみてはいかがでしょうか。

＊刊行から 10 年を経て、話題となっているこの本＊

361-カ 『友だち幻想』　菅野 仁 ‖ 著　筑摩書房

自分以外の人間は、家族であれ、友人であれ、恋人であれ、他者である。どんなに気が合い、通じ合っていると感じていても、どこかで違う考えを持っている他者なのだ。そんな言い方をすると冷たいような感じがしますが、この“自分以外の人間は他者”という認識を持って、人間関係を考えてみると、スッと心が軽くなる部分がきっとあるはずです。“人との付き合い”はこうあるべき、という自分の中の概念が変わるきっかけにもなると思います。特に10代の頃は、友だちとの関係に悩むことが多い時期ですから、誰かと衝突したり、関係に悩んだ時にこの本を役立ててください。

★映写会のお知らせ★　10月25日（木）15：10～　桔梗ホール

『空海 ― KU-KAI ― 美しき王妃の謎』を上映します。
原作は夢枕獏。若き日の空海が白楽天と共に楊貴妃の死の謎に迫ります。
絢爛豪華な映像とスケールの大きさが見どころ。出演：染谷将太・阿部寛他

料理レシピ本2018

★料理部門　大賞★

596-セ 『みそ汁はおかずです』　瀬尾 幸子 ‖ 著　学研プラス

食卓の定番であるみそ汁。口に運んだ瞬間、体だけでなく、心までほっこりとあたたまる感じがしませんか。この本は書名のとおり、それだけでおかずにもなるような具だくさんのみそ汁レシピ本です。バターが入ったり、ウインナーが入ったり、さつま揚げが入ったり、トマトが入ったりと、「こんな具もみそ汁に合うの？」と驚きのレシピもありますが、どんな具も受け止め、おいしく包み込んでくれるのがみそ汁のすごいところ。作り方も凝ったものでなくシンプルなものなので、毎日、手軽に作ることができます。定番のみそ汁だけでなく、新しい具材もどんどん試してみてください。

★お菓子部門　大賞★

596.6-シ 『へたおやつ』　白崎 裕子 ‖ 著　マガジンハウス

「“へた”でも上手に楽しく作れるように考えた、やさしいおやつ」というコンセプトで作られたレシピ集です。型ぬきしなくていいクッキーや膨らまなくてもいいシュークリーム、めん棒で生地を伸ばさなくてもいいタルトなど、気負わずに作ることができるレシピは、お菓子づくりのハードルもグンと下げてくれます。しかも、小麦粉・卵・バターを使わないレシピばかりなので（中には、乳製品を使わないチーズのおかしのレシピもあります！）、今まで「食べたいけど、この材料が入ってるから…」と諦めていた人にもぜひおすすめしたい1冊です。

図書館司書の「今月はこの本を読みました」

前日までは真夏のような暑さだったのに、唐突に秋は訪れ、肌寒さに包まれました。うるさいほどだった蝉の声もいつの間にか絶え、そのかわりにどこからか金木犀の香りが流れてきます。秋を感じるとなんとなく不安で淋しい気分になるのは私だけでしょうか？そんな気分を少しでも吹き飛ばして欲しくて**『極上の孤独』（S159-シ　下重暁子 ‖ 著　幻冬舎）**を読んでみました。この頃では米国のブリガム・ヤング大学の研究発表から、「社会的孤立」によって 29%、「孤独感」によって 26%、「一人暮らし」によって 32%死亡リスクが高まるという、孤独の健康への悪影響が認識されています。イギリスでは孤独担当大臣のポストが新設されました。孤独は避けるべきリスクです。そこにあえて「孤独ほど、贅沢な愉楽はない」という下重さん。孤独こそが自分を知り、品性をつくりあげ、人として成熟させると主張しています。秋の夜長、淋しいという感情を突き抜け、自分を見つめる孤独と向き合って人間的成長を試みるべきかしら。【鈴木】

そうだ、先生と本のことを熱く語ろう!! ～眞野先生編～

司書（以下　司）：眞野先生は、去年のおすすめ本では太宰治の『トカトントン』を、今年のおすすめ本では村上春樹の『雑文集』を紹介してくださいましたが、ジャンルの違う2冊だったので、普段はどんな本を好んで読んでいるのかなぁと気になります。

眞野先生（以下　眞）：私、実は小説はあまり読まず、自己啓発本ばかり読んでいて…（笑）だから、物語や小説は読むのが得意ではないんです。

司：えーそれは意外でした。村上春樹の『雑文集』がエッセイだったから、村上春樹が好きで小説だけでなく、エッセイも読んでいるのかなと思っていました。

B914.6-ム 『雑文集』
村上 春樹 ‖ 著　　新潮社

眞：村上春樹の小説は、本屋さんで立ち読みして、パラパラと読む程度で、ちゃんと読んだものってないかもしれないです。『雑文集』に収録されている『壁と卵』というのは、エルサレム賞を受賞した時のスピーチなんですけど、これをテレビで見て、「なんで、この人こんなに表現の仕方がおもしろいんだろう！」と興味が湧いて、本を手に取ったんです。

司：そうだったんですね。では逆に太宰治の『トカトントン』は小説ですが、こういう小説を読むのは稀ですか。

眞：父親に小さい頃から「本を読みなさい」「太宰治や夏目漱石の名作はよむべきだ」と言われていて、そう言われると読みたくなくなるというのを経験したんですけど（笑）、それでも「短編なら読めるかもしれない」と手にとったのが太宰治の『ヴィヨンの妻』でした。

B913.6-ダ 『ヴィヨンの妻』
太宰 治 ‖ 著　　新潮社

司：それはいくつの頃のことでしたか。

眞：ちょうど高校生の時でした。元々、本が好きというよりも「ダンスで何をテーマにしよう」から私は本を手に取っています。

司：なるほど。そうやってダンス作品のテーマ探しに読んだのをきっかけに好きになった作家さんはいますか。

眞：特定の誰かを好きになるのではなく、太宰治だったらこれが好き、村上春樹だったらこれが好き、と作品を好きになる感じですね。「おもしろかった」という感想ではなく、舞踊化するのに1番難しかったのはニーチェの『ツァラトゥストラかく語りき』でした。

B134-ニ 『ツァラトゥストラかく語りき』
フリードリヒ・ニーチェ ‖ 著　　河出書房新社

司：ニーチェですか！それは…大変そうですね。

眞：大体、「この本おもしろいな、作品にしてみようかな」と思った時には、「この言葉いいな、こういう場面を作ろう」「こういう雰囲気がいいかな」と構想が浮かんでくるんですけど、ニーチェの作品は文字を追うのに必死で、全然場面のイメージが浮かんでこなくて、すごく苦しかったです。

司：ダンスの作品に繋がるテーマ探しとは切り離して、最近、読んでいる小説などはありますか。

眞：まだ読み始めたばかりですけど、窪美澄の『水やりはいつも深夜だけど』です。

913.6-ク『水やりはいつも深夜だけど』
窪 美澄 ‖ 著　　角川書店

司：おお！前回、関口先生もおすすめしていた本ですね。私も窪さん好きなので、眞野先生からも窪さんの名前が出てきて嬉しいです。私は『ふがいない僕は空を見た』を読んで衝撃を受け、それから他の作品も読んでいます。

眞：私も初めて読んだのは、その本でした。確かに衝撃的ではあるけど、現代社会を反映した作品ですよね。あとは『晴天の迷いクジラ』や『よるのふくらみ』も読んだし、窪美澄の本は結構読んでいます。もうちょっと高校生向けの本で最近読んだのは、朝井リョウの『何者』です。朝井さんは他に『桐島、部活やめるってよ』も読みました。

913.6-ア 『何者』
朝井 リョウ ‖ 著　　新潮社

司：朝井さんは、誰もが抱えたことがあるだろう感情の動きを描くのが上手な作家さんですよね。私にとって『桐島、部活やめるってよ』はまず書名がすごく気になって読んだ作品ですが、眞野先生が本屋や図書館で「ここに惹かれると手に取ってしまう！」という基準みたいなものってありますか。

眞：タイトルが説明的な本をいつも取っているかもしれません。『水やりはいつも深夜だけど』とか『桐島、部活やめるってよ』とかもそれに当てはまりますね。でも、これ自分でも今初めて気づきました。

司：説明的なタイトルに惹かれる、か！おもしろいですね。

眞：言葉というものが好きで、自分のモチベーションを上げる言葉とか、作品に使えそうな言葉を探すのが好きなんだと思います。そういう類でいくと『365日の広告コピー』を読んだりしています。

司：心に留めておきたい言葉がたくさん載っているいい本ですね。眞野先生にとって本は物語の世界を楽しむものというより、人生の糧になる言葉や考え方を探すものという感じがします。

674-ラ 『毎日読みたい365日の広告コピー』　ライツ社

眞：そうだと思います。自分にないものとか、自分の知らないことを知るのが好きです。これは最近、気がついたことですけど、私は高校生の時から寮生活をしていて、すぐ近くに大人がいなかったので、わからないことを本から学ぶってことが多かったです。なので、私にとって本は“情報源”です。

司：本を読む＝物語を読むってイメージがあるけど、本は何かを知るためのツールとして存在するものでもあるんですよね。だから、最初から最後まで、きちんと読まなくちゃいけない、ってこともなくて、必要なところを必要な時に抜き取って読んだっていいのだから、読書が苦手って人も身構えずに本を手に取ってほしいです。

眞：図書館という空間は居るだけで落ち着く場所なので、そこで画集をパラパラと眺めたりするのも好きです。

司：それって、ものすごく素敵な時間の過ごし方ですね。

眞：詩集にも一時ハマっていて、金子みすゞと谷川俊太郎は「知らない詩はない！」ってくらい読み尽くしました。

司：それぞれの魅力ってどんなところですか。

眞：谷川さんは優しいんだけど、いきいきしている感じ。金子さんは、結構チクチク刺さってくる感じがします。『わたしと小鳥と鈴と』って詩もみんなと自分が違っているのはわかっているんだけど、もどかしくて、切なくて、うずうずする感じなんですよね。それがすごくいいなぁと思います。谷川さんは『心の色』という詩が好きです。感情を色彩に置き換えて表現している詩なんですけど、「いっそもう一度　まっさらにしてみたい」って言葉はすごく共感できて、色々な瞬間に頭に浮かんできます。

911.5-カ 『わたしと小鳥とすずと』
金子 みすゞ ‖ 著　　JULA出版局

司：秋草の図書館は画集や詩集の棚の近くにちょうどいい具合でくつろげる椅子もあるから、みんなにもそこでいい時間を過ごしてほしいな。

眞：本のよさってある日突然気がつくものだと思うから、色んな本を試してみてみんなに気づいてほしいですね。